

Letters

Arpak

レターズアルパック

VOL.216

ISSN 2432-5295

は ず む

C O N T E N T

◆【はずむ】…01～04

- ・モノが弾み、ココロ弾む
- ・価値あるレガシーをめざして
- ・「心はずむ」この瞬間とこの場所を大切に
- ・心はずむ日々
- ・お酒がはずむ
- ・献血 70 回の表彰をはずみにして

- ・事務所の移転をはずむきっかけに

◆今、こんな仕事しています…05～07

◆arpak spirits…08

- ・日本万国博覧会会場計画

◆近況 & イベントのお知らせ…09～10

◆まちかど…裏表紙

- ・メルボルンの日常をつくるカフェや公共空間

「はずむ」という言葉にはたいたい4つぐらいの意味があるようです。自動詞として①はねかえる、②うきうきする、③勢いづく、他動詞として④気前よく出す。それぞれ少しずつ意味が異なりますが、あえて共通点を見つけるとすれば、いずれも行為や気持ちが普通より増幅する（させる）ということでしょう。うか。そして、その背景には何かきつかけになるものがあるのです。それは例えば、重要な出来事であったり、大切な出会いであったり、褒められたことであったり、…。

今号のテーマを決めるにあたっては、まさにアルバックにとって、そのきつかけとなるうれしい出来事がいくつか重なったことが決め手となりました。きんきょうでご紹介しています。あわせて、所員から「はずむ」をテーマとする小文を寄せてもらいました。

みなさんにも「はずむ」きつかけが訪れますように。

レターズアルバック編集委員会

モノが弾み、ココロ弾む

三輪泰司：
名誉会長

わが家の家訓第
二条は「意味な
き費用は費やす
勿れ」といいま
す。

裏返すと「意味ある費用は思い切りよく使え」。その意味は？。

祖父存命中には、聞きもらしました。家譜・墓誌等の記録により歴史探究する方法があります。

リスク分散と大改革

本田味噌「丹波屋」には元治元年（1864年）の「御台所御用控」が現存します。初代茂助が、天保元年（1831年）に創業し、禁裏御用に励んで三十四年、世相は激動の時代。その三代目は、茂一郎と私の祖父・芳太郎の兄弟でした。明治十四年（1881年）

十二歳の次男・芳太郎は養子に出されました。明治十二年、徴兵令改正に備えてですが、三代目兄弟のリスク分散です。初代と二代目は、格言「唐様で、売り家と書く、三代目」を知っていたのです。それで、次男



中長者町新町の「陽居」

は養父の公卿侍の三輪を名乗り、明治二十九年（1896年）二十七歳で分家しました。当の次男は、所帯を持って自覚し、考えたでしょう。潰すか、大改革するか。熟慮を重ね、徹底的な近代化の道を選びました。独立のため調達した資金5万円を投資し、土地・工場・設備等、資産に換えました。「意味のある費用は思い切って使え」です。

響き合う技術と感性

動力源は石炭ボイラー、搬送はベルトコンベアー。工場も住居も蒸気による全館暖房。番頭たちはボイラー・天井走行クレーン・フォークリフトなどの免許をとりました。

祖父は、この経験から自分の後の三代目、即ち孫世代の私たちがボンクラ育ちで、事業を危うくする怖れに対処しました。二人の「新三代目」のうち、私の方をリスク分散、即ち、別の道へ進めようとなりました。妻、即ち祖母の兄が、天童寺組の大工でした。昭和十三年（1938年）、六十九歳で隠居。小学校六年生の私を隠居の立地選定から連れてゆきました。大工・庭師とのやりとりも聞かせました。長押は北山丸太でした。どのように偶合せするのだろうか。感動しましたね。芸術作品のようです。

茂一郎・芳太郎は、十一歳も違いましたが、とても仲の良い兄弟でした。茂一郎さんが訪ねてくると、玄関の四畳半で、話し込んでいます。私はお茶を出す係り。玄関に、ピカピカに磨きこまれた置物がありました。紫の袱紗に置かれ、シュールなオブジェのようです。実は、ボイラーの真鍮製蒸気拔でした。



伊庭新太郎：静物 1967年（二科会常務理事・嵯峨芸大名誉教授）
アルバック・アート・コレクション第1号（自己資産第一号）
＜具象から抽象への初期・油彩4号＞

価値あるレガシー をめざして

福井秀樹：
名古屋事務所

2027年リニア中央新幹線の品川、名古屋間の開業が予定されています。

その前年の2026年、「アジア競技大会」が愛知・名古屋で開催されます。名古屋市には大会を一過性のスポーツのイベントで終わらせるのではなく、開催効果をスポーツの振興をはじめ、交流人口の拡大、国際交流の促進、国際競争力の強化など様々な分野につなげていくことが求められています。そのため名古屋市は大会を契機として市がめざす姿とその実現に向けた取り組みを明らかにするレガシービジョン（アジア競技大会NAGOYAビジョン（仮称）の策定に取り組んでいます。ビジョンではSDGsの理念を踏まえ、「夢や希望をはぐくみ、誰もが自分らしく生きる」、「アジアとともに歩み、更なる飛躍を遂げる」をコンセプトに4つのめざすまちの姿を掲げています。（以下は各まちの姿からの抜粋）

まちの姿1 健康・地域活力

誰もが生涯にわたって身体活動に親しみ、活動的で充実した生活、すなわちアクティブライフを送ることができる土壌を創出することで、市民の健康寿命の延伸をはかるとしています。

まちの姿2 魅力・誇り

名古屋市実施の主要8都市魅

力度調査にて「行きたくない街ナンバーワン」と不名誉な結果が続いていることから、名古屋城天守閣の木造復元、コスプレホストタウンの推進など名古屋が有する魅力資源の磨き上げに取り組みとしています。

まちの姿3 国際交流・多様性

豊かな国際感覚を備え、多様性に理解を示す市民の育成に取り組むとしています。愛知県は東京都に次いで全国2位となる約55万人の外国人が住んでおり、今すぐにも取り組むべき課題と考えられます。

まちの姿4 イノベーション・持続可能性

大会のレガシーとなる選手村は津波浸水などが危惧され人口が減少するエリアに整備します。（競馬場跡地を活用）成熟都市での開催における選手村の新たなモデルを構築するとともに、周辺地区のにぎわいと新たなブランドの形成に向けたまちづくりが求められています。

また、製造品出荷額が全国一位である愛知県の中心都市名古屋に今後求められる機能として、企業の交流・共創を促すイノベーション拠点の設置・運営を経済団体等との連携により実施していくこととしています。大会を契機に「はずむ」ことができるのか、愛知・名古屋の挑戦が始まったところです。

「心はずむ」この瞬間 とこの場所を大切に

清水紀行：
都市・地域プランニンググループ

子どもの小学校の運動会は、例年、秋開催なのですが、今年は夏休みにプール設置工事が始まることから初の春開催となりました。

うちの子どもが通っている小学校は小規模特認校※で、息子（6年）の同級生は6人、娘（2年）の同級生は8人で全校生徒が50人程度です。学校は豊かな自然に囲まれた環境にあり、春はワラビ採りや田植え体験、夏は郷土芸能の盆踊り、秋は稲刈りやだんじり祭り、冬は餅つきやしめ縄づくりなど地域の人々との交流を通して、通常の学校では中々味わえない体験をさせて貰っています。

そういう環境ですので、運動会も学校行事の枠を超えた地域の一大イベントです。先生や保護者はもちろんのこと地域の老人会や卒業生も一斉参加です。私も例年、借り物競争、綱引きへの参加は必須です。

子どもたちのダンスや徒競走、リレーにワクワク、老人会の競技にはヒヤヒヤ、保護者の競技でクタクタ・・・となりますが、「心はずむ」1日となります。

全ての競技終了後には、卒業する6年生が校庭を一周し、それをみんなが拍手で見送るのですが、自分の子どもで無くてもつ

いつい涙腺が緩んでしまいます。小規模特認校ですので、地元の子どもは年々減少しており、今年の新入生でも地元在住の子どもは1〜2人しかいません。全校生徒をみても大半が校区外からの越境通学です。しかし、地元の方々は「地元小学校があることが大切。いつか息子や娘が帰ってきたときに学校が無いと困るやろ？」という想いを持って、様々な形で学校運営に協力されています。

息子も今年で卒業し、娘がお世話になるのは後4年間となります。貴重な「心はずむ」瞬間と、子どもたちがお世話になった地域や学校を大切に守っていき

たいと思います。

※小規模特認校とは、中山間地などの自然環境に恵まれた小規模な学校において、その特色を活かした教育に取り組むことで心身の増進等を図ることを目的にした学校。過疎地における学校存続のための適用方策のひとつでもある。



心はずむ日々

山崎裕行：
九州事務所・(株)よかネット

「はずむ」には、「嬉しい」「楽しい」「気持ちが良い」というような印象があります。

日頃、どのような場面があるかなと思うと、業務に関連して言えば、企画書を書くときでしょうか。「お題」に対して、どのような提案をするか。実際に現地を見て回り、素敵な景色や美味しい食べ物に出会えた時はもちろんのこと、あれやこれやと考え、提案書としてまとめる行為は、気持ちが弾みます。その企画書が無事に当選できれば、殊更です。

また、相手と意見を交わしながら何か作り上げていく時も、心が弾みます。例えば、会議の内容やそこで示す資料、その会議のゴールなどは、色々な視点から考える方がより充実するように思います。仕事を通して新しい発見に出会うと、ウキウキします。

業務以外でいえば、私は乗り物全般好きで、特に鉄道好きですが、新しい車両やなかなか見ることがない古い車両に出会った時、運転席のすぐ後ろから景色を眺めることが出来た時などは弾んでいます。同じ風景でもスピードの違いや運転の違いで、見え方が異なります。運転席のすぐ後ろからの景色は、いつまでたっても飽きることがありません。

少し、弾むとは違うかもしれませんが、今まで訪れたことがない町や、昔ながらの風情が残るまち、路地裏などを歩くときも、どこかワクワクしています。古びた看板、毛づくろいする猫、軒先に吊るしてあるにんにくや玉ねぎ、哀愁漂う赤ちようちんなど、どこかほっとする雰囲気がある。人々の生活感がヒシヒシと伝わってくる場所に惹かれています。

そうそう、大事なことを忘れていました。最近、体重を絞ることを意識してしまっていて何とか順調に減っています。最大で97キログラムあった体重は、今は87キログラム、88キログラムです。妻からは、顔が細くなったと言われます。できれば、おなか細くなつて欲しいのですが、そこらは見た目ではあまり変化がないようです。でも、おかげさまでズボンはワンサイズ下がりました。これも、心弾みます。

いろいろと書きましたが、やはり最近、子どもの成長を見る時でしょうか。1歳半なのですが、出来ることが色々増えて、好き嫌いの意思表示もはっきりします。狭い部屋の中を走り回るので、よくこけたり、ぶつかったりして、親をソワソワさせますが、本人はニコニコ笑顔、平気そうです。子どもが発する「やー」とか「だー」といった言葉を必死に理解して会話を楽しんでいます。1日1日、学びを与えてくれる子どもの成長に、心が弾む日々です。

お酒がはずむ

杉本健太郎：
建築プランニング・デザイングループ

まだまだ半人前で未熟な私ですが、最近やっと日本酒が少しだけわかるようになってきたかもしれません。

個人的に思っていることは、日本酒の味の違いを感じることできたら、大人の世界に一步近づけるのではないかということです。

日本酒に興味と憧れがある私ですが、旅行などで各地を訪れたとき、行く先々でその土地の地酒を見かけるたびに、名前、ラベルのデザインなども含め、本当にバリエーション豊かで素晴らしいと感じていました。日本は四季があり、北から南、東から西へと移動すると、実に豊かで多様な気候・風土を感じることが出来ます。初めて行った場所の景色、おいなどを

うっと感じることが好きで、幼少期は家の周りに水田が無かったためか、特に田んぼと水辺の風景に心惹かれます。日本酒は、勝手に解釈するならば、その田園風景から育まれた米と水と原料とし、その土地の気候・風土と人の手によって醸成された、まさにその土地ならではの風景を味覚によって感じるものではないでしょうか。しかしながら、旅先でお酒を飲むときは、ついビールを頼んでしまい、途中で日本酒を飲んでみても、味の違いがわからないままです。

そんな私が最近、日本酒がおいしい!と思う瞬間がありました。業務の帰りにお酒にまつわる神様として有名な京都の松尾大社に立ち寄り、お参りをした後、桂駅周辺で皆さんと共にお酒を飲みましたが、2軒目に行った日本酒バーがなんと良いお店でした。各地の日本酒の中から、薦められた飲みやすい銘柄を中心に飲み比べをしました。どれもすっきりとした味わいながらも、それぞれ微妙に香りや甘みが違い、高尚なおいしさを感じる事が出来ました。もしかしたら、お酒の神様が私を少し大人へと近づけてくれたのかもしれない。



桂駅近郊の日本酒バーにて



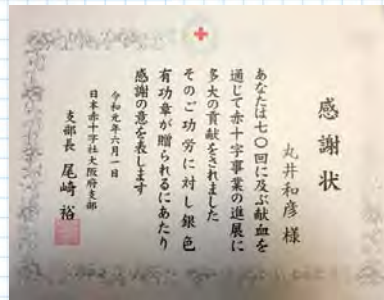
松尾大社（相生の松）にてお参り

献血 70 回の表彰 をはずみにして

丸井和彦：
公共マネジメントグループ

皆さんは献血に行かれたことがあるでしょうか、行ったことがある人の方が少ないかもしれません。針が怖い、血が薄くてできない、時間がない、行けない理由は様々でしょう。

私が最初に献血に行ったのは、大学受験を終えた18歳の春。大病を患い手術を繰り返す父に血を提供してくださる「誰か」に恩返しをしたいという一心からでした。そこから足掛け8年、先日70回目の献血を済ませて、日本赤十字社から感謝状を受けました。



献血 70 回の感謝状

売血が盛んに行われていた時代が去り、元号が令和と移り変わっても血液は人工的に作る事ができませんし、永久的に保存することもできません。加えて献血には年齢制限もあるため、将来の血液不足が危惧されています。若年層の献血離れを食い止めようとPR活動が盛んに行われているものの、順風満帆で

献血を多くこなしたから自慢できる世界でもありませんし、献血しなかったから恥ずべきことでもありません。しかし、分かっているながらも、70回という数字は誇らしいものですし、献血に行ける体を作ることが健康を維持するモチベーションになっているのもまた事実です。100回目の献血ではまた表彰状を頂けるということなので、この表彰をはずみにして、こつこつと続けていきたいと思っています。



献血のイメージキャラクター「けんけつちゃん」



献血 70 回に際し送られた銀色有功章

事務所の移転を はずむきっかけに

山崎将也：
都市・地域プランニンググループ

昨年移転した東京事務所のお披露目（オープンオフィス）を5月に行いました

昨年11月に、それまでの市ヶ谷からJR神田駅にほど近い場所に事務所を移転し、早8ヶ月が過ぎました。市ヶ谷の事務所は駅からやや遠かったこともあり、他の事務所の所員が訪れることも多くありませんでしたが、関東方面で業務を行っている所員が立ち寄る機会も増え、移転を事務所間の連携を深める良い弾みにしてきた、と考えています。

そのような中、遅ればせながら5月31日に、ささやかながら事務所移転のお披露目イベントを行いました。関東を中心に景観、都市デザインなどの分野で活躍されている方々をお招きし、

所内にカウンターテーブルもあります

（小さな事務所ですが）所内のご紹介、ご案内をさせていただきます。その後、会場を変えての二次会、三次会へと



夜まで楽しく語りました

なだれ込み、個々の施設の集合体をひとつの空間として調和させるための方法論や、サウンドスケープを取り入れた都市づくりの必要性など、夜遅くまでそれぞれの分野に関する多彩な話をさせていただきました。来て下さった方々に盛り上げていただいたようなお披露目となりました。

これまで、このような専門家の方々と業務などご一緒する機会はあまり多くありませんでしたが、今回のお披露目イベントも大きな弾みとして、新しいことにチャレンジし、新しい人たちのつながりを構築していくことを大切にしていかなければならないと感じました。

最後に、この場を借りて、お越しいただいた皆様にお礼を申し上げます。

東京都「良好な夜間景観形成のための建築計画の手引」の作成を支援しました

依藤光代：

都市・地域プランニンググループ



ビル頂部の照明によりまちなみの一体感を演出する、丸の内エリア

首都の夜間における光環境と地域の魅力を向上するため、夜間の景観形成の配慮事項を掲載した手引きを作成しました。

東京都内には、東京駅周辺の風格あるエリアをはじめ、にぎわいの光が水面に映り込む臨海部、緑豊かで落ち着いた住宅地が広がる丘陵部、夜間も活動的な商業・業務地など、多様な夜景の特性があります。特性を生かした夜間景観づくりのため、光の質を向上するための基本的事項や、地域ごとの配慮事項をまとめています。

光の質の向上のための7原則として、光と影を対比的に生み出して陰影をつくりだす、人肌

を美しく見せる光源を用いる、四季や時間の変化などに応じて演出を変える等のポイントを紹介しています。その中で色温度については、住宅地は安らぎを感じる低い色温度が適している一方で、業務・商業地では高揚感のある高い色温度が用いられる場合もあります。近年ではクリエティブな発想ができる環境づくりとして、リラックスできる低い色温度を用いるオフィスも出てきており、空間の目的に応じた色温度の検討を勧めています。

東京都景観計画に定めている地区区分ごとに、夜間の景観形成基準を解説し配慮事項をまとめているほか、大規模建築物等については光の演出の考え方や環境への配慮、屋外広告物の照明における注意点などを解説しています。赤く点滅する航空障害灯については、設置基準が緩和され消灯や低光度化が可能になったことを紹介しているほか、オフィスビルからの漏れ光を抑制するための対策や停電対策も盛り込んでいます。

夜間に浮かび上がる一つひとつの光が磨かれ、つながることにより、より一層魅力的な夜景となっていくことを楽しみにしています。

韓国のeスポーツ※注動向と大阪eスポーツ研究会の立ち上げ

朴延：

地域再生デザイングループ



ソウル OGNe スポーツスタジアム

1998年韓国にスタークラフトというPCゲームが現われ、全国で爆発的な人気を得ました。同時にネットカフェも発生しました。

ネットカフェが最も多かった時期は2万店（現在は約1万店（日本は3千店））であり、韓国のネットカフェは日本より人口比約8.5倍も多いインフラを持っています。

1999年以降スタークラフトの爆発的な人気を基にゲーム専門放送局が開局され、プロ選手が登場しました。2003年には大企業のプロチームによるリーグ戦が始まりました。翌年7月釜山で行われたスタークラフトのプロリーグ決勝戦で観客10万人を集め世界的にも注目を浴び、eスポーツのメッカになりました。またそこでスーパースターが多数生まれ、女性ファンが多くなりeスポーツは文化として成り立ちました。一方韓国政府もこれを機に積極的な支援が始めました。

1998年〜2012年まで大人気であったスタークラフトのプロリーグのブレイクが終り、LOLというゲームが登場した2010年以降、韓国のeスポーツは大

転換しました。その内容として以下の4点が挙げられます。

①eスポーツ振興に関する法律制定（2012年）、②拠点づくり（2016年、国によるeスポーツ常設競技場を設けたこと）、③ゲームの多様化、④やるゲームからみるゲームに転換が挙げられます。さらに様々な世界大会で実績を上げています。

一方日本は2018年がeスポーツの元年であり全国に広まりました。しかし世界のeスポーツ先進国と比較すると10年以上遅れています。eスポーツがオリンピック種目に検討される今、世界的eスポーツの波に乗るためには様々な準備が必要とされます。今年4月、(株)スポーツタカハシさんからeスポーツを活用して大阪ミナミを盛り上げたいとお話を伺い、大阪ミナミでeスポーツの甲子園を目指し、「大阪eスポーツ研究会」の設立について検討しました。

また産官学のタイアップとまちづくりにつなげることが重要であることを共感し、国、大阪府、大阪観光局、大阪商工会議所、大学、アメリカ村の会、様々な企業の方々にご相談・ご協力してもらい2019年5月31日に研究会を立ち上げることができました。現在、研究会では世界におけるeスポーツの現状とミナミがやるべきことについてのセミナーを開いています。これからは継続的な活動展開に向けて、取り組んでいきます。

※注：「eスポーツ」はエレクトロニック・スポーツの略字であり、PCゲーム・ビデオゲームなどを媒体にし、複数のプレイヤーで対戦する。

はじめまして、松茂係長です

松茂係長の Twitter はこちら→  <https://twitter.com/atsushigecho>



渡邊美穂：

公共マネジメントグループ



松茂係長は徳島県松茂町のマスコットキャラクター（ゆるきやら）で、松茂町の特産品6品がモチーフとなっていますが、さて、それは何でしょうか？

今回、特産品のPR業務でマルシェ等のイベントで活用するために1メートルサイズの特大松茂係長ぬいぐるみを製作しました。PRツールとしての特大サイズのぬいぐるみには着ぐるみにはない利点があると思います。

着ぐるみは、動かす役とアテンド役で最低でも2名必要です。また、着ぐるみによっては、動かす役の身長や体型も限られますし、自治体の様々な職員の方がその役を担うため、必ずしも動きは一定ではありません。その上、着ぐるみを脱着する場所も確保しなければいけません。さらに、着ぐるみを装着していただける時間は1回30分程度です。

松茂係長に用いられている特産品（使用されている所）

- ・さつまいも（体）
- ・大根（耳）
- ・ちりめんじゃこ（ネクタイ）
- ・レンコン（バック）
- ・梨（バックの飾り）
- ・浜ねぎ（スマホ）

確かに着ぐるみの「動き」は魅力的ですが、活用するには意外と制約があります。その点、特大ぬいぐるみであれば設置したらOK、時間制限もありません。抱きついたり、少しくらいならこづいたりもできます。（これは着ぐるみではなかなかやりにくいことです。）特大松茂係長ぬいぐるみは今年度から本格的な活用となりますが、PRの役割を果たしてくれる期待大です。

※本業務は地域産業グループの原田弘之、武藤健司も担当しています。

都市と共生する「農」。若手農家7名が「近隣住民との交流型マルシェ」をスタート！！

武藤健司：

地域産業イノベーショングループ



きたなかマルシェ

毎月第2金曜日
朝9時～11時

- 北中で農業をする若手農家7人が運営しています！
- みなさんとのつながりを深め、北中の農地を一緒に守り、盛り上げたいです！！
- 朝採れ野菜、こだわり野菜をお届けします！

マルシェで野菜を食べてほしい

畑にゴミは捨てないでね

北中を元気に！

JAも協力！

市街地及びその周辺地域で行われる農業は「都市農業」と呼ばれ、農業生産だけでなく、産直、防災環境、学習、福祉など、多様な機能の発揮が期待されています。

泉佐野市土地改良区（泉佐野市北中地区）は、市街化区域内に約30ヘクタールの農地（すべてが生産緑地）を有し、宅地と共存しながら営農を行ってきた地域ですが、近年は後継者の減少や宅地開発等により、農地の点在、近隣住民への配慮や関係構築など、担い手の負担が増大しています。

大阪府土地改良事業団体連合会では、平成29年度より調査研究事業（当社委託）として、北中地区のこれからの農業について、土地改良区や農業者有志が中心となり、また、京都大学の研究室とも連携し検討してきました。その試行プロジェクトとして、今年5月から、地区の未来を支える若手専門農家を中心となり「きたなかマルシェ（毎月第2金曜）」を開催

する運びとなりました。

「きたなかマルシェ」は、農産物の販売だけでなく、近隣住民であるお客さんとの会話を楽しみ、生産者のこだわりや日頃の苦労を知ってもらうこと、また、マルシェでの気づきを自身の農業経営にも活かすことが目的です。

7月は泉州水なすやとうもろこしなど、こだわりの新鮮野菜が並び、70名程が来客しました。生産者も「貴重な交流の機会になっている」と、定着に向けて頑張りたい」と意欲的。都市農業のポテンシャルである近隣住民とのつながりが少しずつ生まれています。

※本業務は、地域産業イノベーショングループの原田弘之、遠藤真森も担当しています。



『ひょうごSDGs未来事業塾』が開講します。

中川貴美子：

サスティナビリティマネジメントグループ

近年謳われるSDGsは、誰が（どの部署が）、どんなことを取り組んで行けばよいのでしょうか。

持続可能な開発目標（SDGs）とは、2015年9月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」にて記載された2016年から2030年までの国際目標です。近年、自治体や企業でもその目標を組み込んだ取り組みが求められているところです。

兵庫県下では、全国3地区の1つとして、環境省の平成27・28年度「持続的な地域創生を推進する人材育成拠点形成モデル事業」の採択を契機に、ひょうご持続可能地域づくり機構（HSO）を発足し、地域において持続可能な社会づくりに貢献する事業、人材の育成に取り組んでまいりました（代表理事・事務局…当社所員）。これまで、約130名および法人2団体が受講し、サスティナビリティ・オーガナイザーとして約67名（うちユース33名）を輩出し、修了生たちは各地域で取り組みを行っています。今年度は、テーマを「SDGs」かつ、5期目に突入します。

講座は3つのコース（認定コース、スタートアップコース、高校生・ユース向けコース）を、

対象者や目的別に設定しています。認定コースでは、約1年間かけて、実践者をお招きした座学および先進地視察、そしてチーム別に社会課題の調査、課題解決のための事業のコンセプト整理・事業体制・事業収支等、事業計画の検討を行います。

受講生は、高校生、大学生から地域活動をされている団体や新規事業の検討のために会社の研修の一環としてこられた方など年齢、立場とも様々です。持続可能な地域づくり、SDGsの取り組みに決まった解はありません。この講座で、受講生の方々とともに、各地域に根ざしたSDGsの取り組みに向けた解を見つけていきたいと思います。詳しくはHPまで。

<http://hso-t.com/>
※本業務は、畑中、戸田も担当しています。



4期生開講式
（現在、4つのチームに分かれて事業計画を組み立て中）

経済だけでなく、社会や環境を意識した地域経済循環の推進に向けて

江藤慎介：

地域産業イノベーショングループ



人口減少社会の中で地域の活性化を図っていくためには、地域内での活発な経済循環を促進し、地域を支え、地域が潤う循環型経済を確立させることが重要です。

滋賀県では平成27年に策定した「滋賀県産業振興ビジョン」の柱の1つとして、「経済循環力の強化」を掲げ、各種事業に取り組んできました。そこで昨年度、滋賀県における地域経済循環の現状の到達点を把握するとともに、県、市町、商工会・商工会議所、企業、家計（個人）の役割を検討し、地域経済循環に資する企業のビジネスモデルの「見える化」に取り組みました。県内で地域経済循環に取り組む市町や経済団体、企業・金融機関、コミュニティ等に「検討委員会」で話題を提供いただき、補足調査を行いながら、検討・検証を進めてきました。

これまでの地域経済循環は、特に産業の側面からは「資金」の循環が重視され、地域内へ流入する資金を増やすこと、地域外へ流出する資金を減らすこと、地域内で資金の循環を高めることが目的とされてきました。しかし、人口減少社会、少子高齢化社会に突入した今、これまでの右肩上がりの経済成長

が期待できないことから、資金循環だけでなく環境の負荷や社会的な土台を維持しながら、持続的に経済成長に取り組み必要があることを再確認しました。特に「自然資本」「人工資本」「人的資本」「社会関係資本」を経済循環に活かしていく視点が大切です。

また、こうした地域経済循環を普及・拡大していくためには、経済だけでなく社会や環境の視点からも地域を俯瞰し、事業者や支援機関が有機的に連携していくことが大切であり、地域経済循環を評価する仕組みづくりや、立場の異なる組織が共創する推進体制の構築など、引き続き研究していくことが求められます。このため、昨年度は研究会と並行して「地域経済循環コーディネート・養成講座」を開講し、地域経済循環の評価方法に係る演習や、県内の事例視察を通じて、16名の地域経済循環コーディネーターが飛び立っています。



「万博の会場は、たったの5年で基礎調査から計画・造成・展示まで疾風怒濤のように行った。事務所に泊まり込み、徹夜で作業を行うこともあった。」

1970年の日本万国博覧会は想像を絶する大変な事業だったようです。会場計画は、「前半西山・後半丹下」と言われていたように、京都大学の西山グループは第2次案のマスタープランまでを作成し、丹下グループへと引き継がれました。第2次案のマスタープランに至るまでは、配置計画、土地造成計画や交通計画、インターチェンジの検討、跡地利用計画などが検討されました。

「検討は複数チームによる案を戦わせながら段階的に検討を進めていくワックスマン・ゼミナール方式により行なった。作成するのはマスタープランであり、提示した通りに実施計画が進むわけではないことは理解していた。」

第2次案の作成後、計画の最も大切な部分であるシンボルゾーンの整備、水のリサイクルシステムの導入、お祭り広場の整備の3点を引き継ぐよう丹下グループの磯崎新氏に伝えたとのことでした。当時はマスコミに追いかけられ、落ち着いて話せる場所もなく、話し合いは野尻湖のボート上で行わ

れたそうです。

水のリサイクルシステム（水系）は公園となった今でも残っています。計画の位置付けを理解しながら、大きな考え方として何が大切かを考え、決定していくことが重要だと感じました。

「万博会場計画は造成技術の発展と計画技術の進歩への契機となった。万博会場の敷地であった千里丘陵は造成前には60メートルもの高低差があり、これを均すための技術が必要とされた。今の日本では造成計画は土木の分野と考えられているが、当時は建築家が全て計画した。」

現在では建築家の職能は非常に限定的になっています。しかし、本来、建築家というのは人間をとりまく環境全てを計画・設計する役割を担うべきものだったのです。

後に万博会場は公共用地として300ヘクタールのこり、リザーブ用地として後々活用されていくこととなりました。都市の庭として、現在の万博記念公園のような広い緑地や公園は非常に重要なものです。



会場模型を前に話す三輪

「近年、レガシーという言葉が盛んに使われている。レガシーを考える上では重要かつ様々な視点があるが、特にロケーションを考えることが重要である。」

ずっしりと重い会場計画の基礎資料図集を見ると、日本地図のスケールから検討が行われており、さまざまな面やスケールからトコトン考え抜く姿勢を忘れてはいけないということを再認識しました。

計画を作成していた時、三輪は34歳。当時は大学の研究室で行なっていた団地の計画で造成計画をしていたことや、世界の都市や建築・都市計画事務所を回ったこと等、それまでの経験や知識が、万博会場の計画に活かされたのです。

「万博会場計画からは、ただ計画することだけでなく、経営の観点の大切さを学んだ。この時に学んだ経営の観点と計画技術を組み合わせることができなのが、アルパックの強みでもある。」

アルパックが万博会場計画に関わったというのは知っていました。が、具体的にどんなことをしたかというのは知りませんでした。今回、会場計画や会場内の警備消防本部を設計した際の逸話などを聞くことができ、創業当時のアルパックや三輪のことを知る非常に良い

機会となりました。

また、三輪がロシアやヨーロッパのまちや設計事務所を訪ねた話から、若いうちにいろいろな都市を見て学び、経験を積むことの大切さを改めて実感しました。

なお、現地では日本万国博覧会記念公園事務所の木下朋大さん、陣門泰輔さんに公園の現状についてのご説明とご案内をいただきました。ありがとうございました。



「arpak と日本万国博覧会」

1970年に大阪で開催された日本万国博覧会の会場計画第二次案の作成に、京都大学西山卯三研究室のメンバーらと共に参画し、また会場内の警備消防本部の設計も行いました。



熱気あふれるベトナム南部を訪問してきました

地域産業イノベーショングループ

アルパックでは一昨年、ホーチミン市に事務所を開設し、ベトナム人のチャンをメンバーに迎えるなど、ベトナムにおける地域づくりや日越連携による産業振興に関する新たな事業展開を模索しています。当グループは、5月中旬にベトナム南部を訪問してきました。3泊4日の強行軍ですが、①リゾート開発が進むフーコック島、②メコンデルタ最大の都市カントー、③ココナッツ産地のベンチェ、④ベトナム最大の商都ホーチミンなど、南部各地の現状と今後の可能性を実地調査してきました。

※ ※ ※

①国を挙げたリゾート開発が進むフーコック島

ホーチミンから空路で45分、週末リゾートも可能な島です。リゾート開発会社の方に開発の経緯や現況、今後の展望についてお聞きしました。西沿岸部では急速にリゾート開発が進んでおり、その規模と勢いは圧巻でした。また、島の特産品である胡椒、ニョクナム等の製造・販売所を訪問しました。販路先は本土や海外への拡大を控え、島でないと入手できない希少性でブランド化を図り、来島の魅力にもつなげている点が印象的でした。



フーコック島 Mercury Resort & Villas

②メコンデルタ最大都市カントー

カントー市の人民委員会投資貿易促進センターを訪問し、アン副局長とジャパンデスクの市川アドバイザーと懇談しました。同市は、ベトナム南部のメコンデルタ最大の都市であり、近年はハイテク農業化や工業団



カントー市人民委員会投資貿易促進センターでのヒアリング

地の造成など、急速な発展がみられます。輸出加工型企業の生産拠点として注目されており、日系メーカーの進出も進んでいます。「Next・ホーチミン市」の一角として、今後ますます注目されていくと思われます。

③のどかな農村地帯ベンチェ

焼きココナッツ飲料の製造業者と、自然環境を生かしたリゾート施設の運営事業者を訪問しました。どちらも事業を始めてまだ数年ですが、自らの事業だけでなく周辺地域の振興と結びつけて事業展開を図っている点が特徴的です。ココナッツは近隣農家と契約し、地元特産の品種を栽培指導。リゾート施設では伝統産業をめぐるツアーが現地の人たちを元気づけていました。



焼きココナッツ飲料

④ベトナム最大の商都ホーチミン

ホーチミン市人民委員会投資貿易促進センターを訪問し、ヴァン次長はじめ幹部の皆さんと懇談をしました。日本企業の進出や投資の窓口として、既に日本側の公共セクターとも多数連携されているようです。一方、両国間の更なる経済交流の深化には課題もあるようで、私たちも微力ながらお役に立ちたいと考えています。

※ ※ ※

今回の現地調査全体を通じて、ベトナム南部における経済成長を体感するとともに、彼らが直面する課題の一端を垣間見ました。開発途上国にありがちな「とにかく技術と資金を持ってきて」という姿勢から次の段階への移行期に差し掛かっています。「ASEANの親日国家」の発展に、微力ながら私たちも貢献したいとの思いを新たにしました。

なお、ベトナム訪問には、高野隆嗣、高田剛司、貴船律子、江藤慎介、山部健介、ホアン・ゴック・チャンが参加しました。



近況 & イベントのお知らせ

まちづくり・都市デザイン競技で国土交通大臣賞を受賞しました！

絹原一寛：
都市・地域プランニンググループ

（公財）都市づくりパブリックデザインセンターが主催で今年は愛知県春日井市の「高蔵寺ニュータウンセンター地区」（約21.3ha）を対象に実施され、全国33作品から国土交通大臣賞を受賞。6月14日の表彰式で、大臣から直接賞状を

頂きました。

所内でメンバーを募り、業務とはまた違った視点で都市デザインを議論、提案を形にする機会として取り組んできました。



た。提出時期は2月、業務も多忙な中でしたが、頑張った甲斐がありました。

7月には、春日井市が主催するシンポジウムにもパネラーとして出席させて頂きました。一連の提案が、これからのセンター地区再生への議論材料になれば嬉しく思います。

※提案者は絹原一寛、坂井信行、清水紀行、塗師木伸介、竹内和巳、稲垣和哉の6名。受賞結果は、Webでご覧頂けます。
<https://www.udc.or.jp/publics/index/214/>

「多様な主体の連携による伊丹郷町のまち育て」 2018年度第21回関西まちづくり賞を受賞しました！

中塚一：
大阪事務所長

伊丹市の伊丹郷町でのまち育ての活動が、日本都市計画学会関西支部の「2018年度 関西まちづくり賞」を受賞しました。「多様な主体の連携による伊丹郷町のまち育て」が表彰対象で、官民連携による伊丹版メインストリート・プログラムの展開の成果が評価されました。

「メインストリート・プログラム」の実践

約15年間にわたる伊丹郷町での一連の活動及び事業は、アメリカ地方都市のダウンタウン再生を目的に開発・運営されている「メインストリート・プログラム」で提唱されている4つのアプローチに学び、それを同時並行的に徹底的に実施しているのが、継続して成果を出しているポイントです。

「まちなみづくり」「伊丹楽景」～まちのデザイン～

景観法による景観計画策定、「白雪ブルワリービレッジ長寿蔵」の景観重要建築物の指定、民間企業による「郷町長屋」

や、江戸時代の遺構となる「郷町大溝」などの整備により、郷町らしい景観を創出しました。また伊丹酒蔵通り協議会による行灯を設置した夜景の演出や、周辺商業組織による沿道景観と調和したデザインのバナー掲載等の取り組みが行われています。

にぎわいづくり「伊丹楽市」～地域プロモーション～

「伊丹まちなかバル」「酒樽夜市」等の地域の特性を活かしたイベントは、新たな出会いと連携を生み出しました。その後「伊丹郷町屋台村」、「伊丹クリスマスマーケット」、「鳴く虫と郷町」、「伊丹オートラック」、「イタミ朝マルシェ」などが生まれ、今では様々な活動が、一年中まちなかで開催されています。

こだわりづくり「伊丹楽座」～地域文化・経済の再生～

酒ケキやかす汁うどん、いちじく・レモン・ほしいも等の農産品の活用等による新たな特産品の開発、また町家をリノベーションし魅力的な新規店舗立地を促進する共に、新図書館（ことば蔵）の開館による市民が関わる図書館交流事業としてまちゼミやビブリオバトル、帯ワングランプリ等を開催し、まちなかの活性化と回遊を誘発しています。

人づくり「伊丹蔵楽部」～組織運営～

実行委員会形式やサポーター制度により、まちのビジョンを共有しながら、やりたい人がやりたいコトを行える場（この指とまれ方式）を創出し、多様な「まち衆」が育つ環境づくりをまちなか全体で行っている点があります。官民連携で取り組む多くのソフト事業は、目に見える形で中心市街地の賑わいをもたらすと共に、次の「まち衆」が育つ場としても大きく貢献しています。

伊丹郷町のエリアマネジメントをめざして

今後も、「まちを使いたおす～まちを作るから使う時代へ」「つながるまちづくり～市民の暮らしの目線で、活動や事業を積み重ねていく～」などの一貫した考えのもと、伊丹郷町のエリアマネジメントを睨んだ次の展開が楽しみです。



酒蔵通りでの伊丹まちなかバル

「桜井本町地区における『景観まちづくり&空き町家利活用』プロジェクト」 奈良県景観デザイン賞の活動賞を受賞しました！

山崎博央：
建築プランニング・デザイングループ

本誌Vol.210号でご紹介した銀行建物のレストランへの再生事業を含む取組が奈良県景観デザイン賞活動賞を受賞しました。一連の活動の主体となっているのは「都市再生推進法人桜井まちづくり株

式会社」。旧布団店を改修した地域のまちづくり拠点「たまり場」で発足し、空き町家となっていた旧青果店をコミュニティカフェ「櫻町珈琲店」にリノベーションしました。さらに木造モダニズム建築の「旧京都相互銀行」を再生し、フレンチレストラン『ル・フルドヌマン～櫻町吟～』をオープンさせました（アルパックが改修設計）。

これらの建物は、将来にわたりまちづくりや地域の景観をリードする建築物であり、伝統的な街並みや歴史的景観に配慮し、他の規範となっています。

企画・計画段階では、地元大学と近隣

大学の教員・学生による精力的な調査研究やワークショップ、空き家利活用提案等も行われました。

産・金・官・学・民の協働によるこれらの取組は、様々な工夫によって優れた景観を創出した全国的にも先進的な事例であると思います。



ル・フルドヌマン櫻町吟



夜も外での食事を楽しんでいる

羽田拓也：
地域再生デザイングループ



メルボルの日常をつくるカフェや 公共空間

日常の豊かな暮らしに向けた仕掛けづくりは特別なことではなく、ライフスタイルを体现する都市空間として、日常の延長で考えることが重要だと改めて実感しました。

メルボルの平日の朝7時。中心業務地区(CBD)のストリートでは、オフィスへ通勤する人たちが、テイクアウトしたコーヒーカップを片手に持ちながら歩いています。また、傍らにあるカフェに立ち寄ると、どこも少なからず行列ができ、オープンカフェでス

マホや新聞片手にコーヒーを飲んでいるビジネスマンを見かけます。「カフェの街」とも言われるメルボルンは、CBDの中だけでもものすごく多くの路面店のカフェが営業しています。

1980年代以降のCBDにおける住宅政策により居住人口が増加したことで、様々な土地利用が進みました。その結果、グラントレベルの店舗が増え、もともとのコーヒー文化と相まって、コーヒーショップのニーズも増えていったのではないかと考えます。

日中も仕事仲間とのミーティングをしたり、ランチを取っていたり、ぼんやり自分の時間を過ごしたり。様々な使い方でのカフェの時間を過ごしているのが分かります。これは都市部のCBDだけの様子ではありません。近郊の住宅地にもオシャレなロースターやコーヒーショップが点在しています。

オープンカフェは、そのブースを管理する向かいのお店の名前やロゴが冠され、パラソルやイス、テーブルの出し入れなど、そのお店により管理されています。一方で、パラソルを固定する穴が歩道の上に開けられていたり、一部では、

テーブルなどが固定されていたり、インフラ的に整備されているところも見られます。

また、カフェは朝早くオープンしますが、昼の3時から4時に閉まります。代わりに賑わいを見せるのが、オープン席を設けたレストランなどです。

訪れたのが5月初旬でしたが、南半球ということもあり、日本の10月後半頃の少し肌寒い時期でしたが、ヒーターやストーブで暖を取りながら、屋外での時間を楽しく過ごせる空間づくりがなされています。

こうした日常のライフスタイルを実現し、メルボルのまちの情景をつくるために、官民両方が理解し、支えているように感じました。

日本でこうした場所を活用しようというところからスタート的な気を張った使い方を指向してしまいがちです。きっかけとしてはそういったところからスタートしながらも、普段の暮らしのなかで肩ひじ張らず、まちなかを楽しむ、という視点で、新たなまちの情景をつくっていききたい、とメルボルのカフェの一席で思いを巡らせていました。



お店の使える空間を明示した境界線

表紙写真：伊丹酒蔵通り（伊丹市）／撮影 北山山荘 神谷潔



「レターズ アルパック」は、ホームページからご覧いただけます。

アルパック (株) 地域計画建築研究所

Architects, Regional Planners & Associates, Kyoto
<https://www.arpak.co.jp> E-mail: info@arpak.co.jp

本社・

京都事務所 〒600-8007 京都市下京区四条通高倉西入立売西町82

TEL(075)221-5132 FAX(075)256-1764

大阪事務所 〒541-0042 大阪市中央区今橋3-1-7 日本生命今橋ビル10F

TEL(06)6205-3600 FAX(06)6205-3601

名古屋事務所 〒450-0003 名古屋市中村区名駅南1-27-2 日本生命笹島ビル17F

TEL(052)462-1030 FAX(052)462-1061

東京事務所 〒101-0047 東京都千代田区内神田1-15-7 ユニゾ内神田1丁目ビル4F

TEL(03)5244-5132 FAX(03)6273-7715

九州事務所 〒810-0802 (株) よかネット：福岡市博多区中洲中島町3-8 福岡パールビル8F

TEL(092)283-2121 FAX(092)283-2128

ホーチミン 0908.CJ Building.2-4-6 Le Thanh Ton street. District 1 HCMC.Vietnam (ベトナム)

TEL+84(028)6255-6732



この用紙は「びわ湖の森を元気にする」
Kikitoペーパーを使用しています。